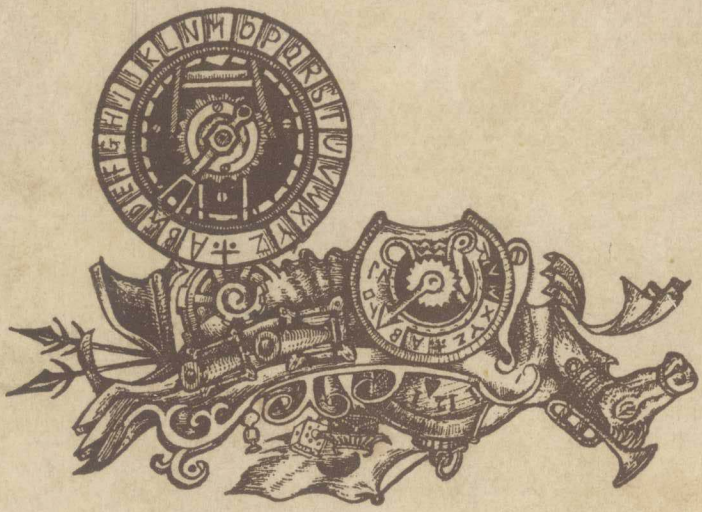


榎本武揚

中央公論社

榎本武揚 ©一九六五 検印廃止
定価五三〇円
昭和四十年七月二十六日初版
昭和四十六年十一月二十五日十版
著者 安部公房
装幀者 安部真知
挿画者 村上豊
印刷者 山元正宜
発行者 山越豊
発行所 中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

榎本武揚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

五年ほどまえ、ある放送局の依頼で北海道旅行をしたさいのことである。釧路から汽車で二時間ばかりの厚岸（あっけし）という町で、面白い話を聞きこんだ。明治もまだ二、三年のころ、船で護送中だった三百人ばかりの囚人たちが、途中で叛乱をおこして、この厚岸の港に上陸したというのである。だが、その囚人たちは、よくよく統制がとれていたらしい。まず乗組の士官に化けた囚人代表が、町の役人たちを船に招待すると見せかけ、一室に監禁してしまった。つづいて、家畜や食料や農具をすべて現金で買い集めると、船から外してきた大砲二門といっしょに手押し車に積み分けて、ゆうゆう奥地目指して脱走して行ったというのである。

その後彼等は、はてしのない原野をどこまでも越えて行き、阿寒の山のふもとあたりで、彼等だけの共和国をつくり上げたと言われているらしい。しかし、その噂もいつか消えてしまい、今ではそれが何処にあったのかを、確めるすべもない。その国が消滅してしまった理由については、諸説紛々だが、いちばんよく行われているのは、住民が男ばかりだったために、あとに子孫を残せなかったという説だ。だがこいつは、あまりもっともらしすぎて、かえって信じがたい。むしろ、定着に成功した

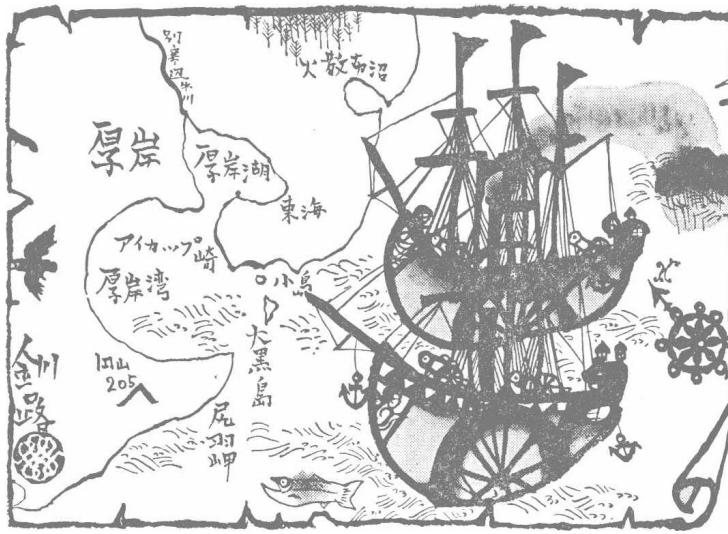
村人たちが、真実をけっして子供たちに告げようとしなかったために、初代の人々の死といっしょに、その記憶も拭い去られたのだと考えたほうがより自然ではあるまいか。問題の大砲については、阿寒湖のどこかに沈められたという言い伝えもあり、再三網をおろしてみた物好きもいたらしいが、まだ発見されたという話は聞いていないという。

この話をしてくれたのは、私が泊った福地屋旅館の当主、福地伸六氏である。福地氏はこの話を、まるで自分の身内のことを語りでもするように、熱っぽい調子で話してくれた。じっさいには私よりも三年くらいしか上でないのに、風に当ると煙のようになる淡い髪の毛のせいか、すくなくとも十年は年長に見える彼が、夢見るように眼を細めて語るのを聞いていると、つい昨日起った出来事のような鮮やかな印象さえ受けるのだった。

たしかに不思議な、味わいのある伝説だと思った。多少筋のとおらないところも、あるにはあったが、いずれけし粒ほどの事実を芯に、こってり砂糖をまぶした金米糖のようなお伽ばなしなのだからと、あえて詮索などの野暮はしなかった。

翌日、やはり福地氏の案内で、その消えた三百人の伝説がさまよう、根釧原野を見てまわることにした。まわると言っても、せいぜいジープで三時間どまりの範囲、百万分の一の地図なら掌ほどある広さのなかの、小指の爪にも満たない部分を、ちょっぴり覗いてみた程度だったが、それでも、この原野の底知れぬ不毛さを知るにはじゅうぶんだった。なるほど、ここでなら、どんな伝説だって乾燥食品のように生きつづけられるにちがいない。

まばらな雑草と、密生した熊笹と、根がなければ宙に浮いてしまいそうな雑木林とが、わけもなく



入り組みながら、際限もなくつづいている。これだけ無用なものばかりを、よくも根気よく集めてこられて来たものだ。鉄道一本へだてた、厚岸の町だって、近海鰊をあさる剝げかかった漁船と、コンブを干している砂浜と、戦争中のちっぽけな砲台の跡と、人間よりも横着な鴉の群と、それにねばねばした綿飴のような霧があるばかりの、朽木のような田舎町だったが、それでも両手をかざしさえすれば、いつでも人間の吐き出す息で、手袋をはいたようにあたたまることが出来た。だがここには、人間をあたためてくれるようなものは、何一つない。オゾンだけは豊富らしかったが、オゾン以外には何もないのだ。

そしてその索莫とした風景を、一本の道が、まっしぐらに切り裂いていた。地形も何もおかまいなしの、ただ一直線の道である。おそらく、死ぬのも面倒臭がっているような怠け者の技師が、現地も見ずに、地図の上に定規で線を引いてつくった道にちがいない。

ジープを降りて、しばらくその道を歩いてみた。

馬車でも落ち込みそうな大穴があいていたりした。ときたま思い出したように、牛乳罐をのせる台があり、その奥の方で、すすけたサイロが馬鹿のようにつっ立っている。隣が見えることは、めったになく、道の尽きるところはすぐ空だ。まっすぐ歩いて行けば、そのまま空の中に落込んでしまいそうだった。この道は、天が下界から時間を吸上げるための、パイプなのかもしれない。おかげで、下界の時間は、すっかり底をついてしまうことになった。こんなところに暮していて、自分が生きていたことを何時まで憶えていられるものやら、すこぶる疑わしいものである。見掛けない鳥が、飛立ちながら、うらめしそうな悲鳴をあげた。緑の森かと思い、ほっとして近づいてみると、白い立枯れた骨の林で、色づいているのは、狂人のひげのような寄生木なのだった。

唐突な感じで、道端に掲示板があり、《今週水曜日の夜××さん方で映画「涙の拳銃」を上映します、茶菓実費、××乳業》という貼札の隣に、はげかかったペンキの字で、次のような文句が書いてあった。

子供の一人歩きはやめましょう

「熊が出るんですよ……」と、福地氏が、苦々しげに顔を突出しながら説明してくれた。「それも、べつに、珍らしいことじゃないんでしてね。ただ、誰もがあまり口にしたがらないので、評判にならないというだけで……まあ、外聞だとか、土地の値下りに対する警戒だとか、そんなところでしょうが……ですから、ここの子供らはかならず二人以上の組になって、わいわい歌いながら通学しています。そのくせ、教室じゃ、野生の熊は大雪山だけに棲むなんておそわって、せっせと棒暗記をやっているんだからな。けっきょく、そんなものかもしれませんね。しっかり口をつぐんでさえいりゃ、熊なんて、居ても居なくても、同じことなのかもしれない……」

福地氏が、何を言いたがっているのかは、すぐに分った。一度でも、例の伝説を耳にしたことのある者になら、いやでもこの風景から、その消えた三百人のことを思い浮べずにはいられないだろう。じつは私も、先刻から、ずっとそのことを考えつづけていたのである。もっとも、私の考えていたことは、福地氏とはちがって、ひどく散文的なものだった。熊が何うしたの、口をつぐんだから何うしたのと、面倒なことは言わなくても、この風景をありのままに見さえすれば、一目瞭然なのではあるまいか。私に言わせてもらえば、彼等は熊について口をつぐんだのではなく、ただ熊の餌食になってしまったというだけのことなのだ。いや、熊だけではあるまい、九十年以上も昔のこの原野になら、飢えだとか、寒さだとか、野鼠だとか、そのほか手ごわい奴がいくらでもいたはずである。

もっとも、そんなことで、むきになる必要もなかった。見たい夢は見させておけばよい。だが、旅館のかたわら運送店の経営までして、町内でも指折りの有力者と言われている福地氏……囚人に心ひかれているのか、三百人に気をとられているのか、それとも共和国に関心があるのか……まるでその後裔がいまも原野のどこかに生きのびているはずだと言わんばかりの、熱っぽい調子に、私はちょっと、からかってみたくなっただけなのだ。

ところが、私の意見に対して、福地氏は、動ずるどころか、むしろ恐縮しながら、小声で私をたしなめたものである。

「でも、ほら、大砲のことがあるでしょう？　……もし、連中が、飢えや寒さで自滅したのだとしたら、わざわざ大砲を始末したりするような、そんな余裕は、まずなかったでしょうからな。しかし、大砲は、現にまだ何処からも発見されておりませんし……」

「発見されないのが当然ですよ。こんな、ろくすっぽ人間も住んでいないような場所なんだから……」

「いや、これでも、歩くだけなら、くまなく歩きつくされています。土地はいくらあっても、水のな

い地方ですからね。住みつくまえに、誰もが、金鉱を探すみたいにして、水の臭いをかいでまわらなけりゃならんのです」
「じゃあ、大砲が発見されないことが、その連中が無事に生きのびられたことの、証拠だとおっしゃるんですか？」
「重要な証拠だろうと思いますね。過去の足取を消そうと思うのは……」ふと、意味ありげな、間をおいて、「まず、たいていの場合、過去よりは現在のほうがましな場合でしょうから」
私はすこし薄気味悪くなってきた。どうも、このこだわりようは、尋常でない。心ひかれる伝説であることは認めるが、だからと言って、なにも昨日のことのような言い方をしなくてもいいだろう。九十年前の噂なら、もっと九十年前らしい扱い方があっていいはずだ。私も多少、意地になって言い返していた。
「しかし、連中が大砲を搬んで行ったという、たしかな証拠があるわけじゃないんでしょう？」
「証拠とおっしゃられると、なんですが……脛に傷をもった人間が、三百人もそろって、無事に逃げのびられたというのは、やはりそれだけの防備をしていたからじゃないでしょうか。さもなけりゃ、さっさと、追撃されてしまっていただろうと思いますがね」
「それにしても、おかしい……たかだか、護送船くらいに、大砲を二門も乗っけたりするものかな？」
「軍艦ですよ。なんでも当時は、海軍さんが、予算捻出のために、演習をかねて、軍艦をいろんなものの運搬にあてていたと言いますから……」
「軍艦を占領したとなると、そりゃ一大事だ。どこかにそんな記録が残っているんですか？」
「まず、ないでしょう。軍の面子ということもありますしね。大砲のことを除けば、船にも、乗組員にも、ほとんど被害はなかったと言いますし……責任者の処罰くらいにとどめて、あとはなるたけ闇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

から闇にほうむった方がいい……」
「軍はともかくとして、町の住民はどうだったんです？　やはり一緒になって黙っていたんですか？」
「べつに、怨まなけりゃならないような事も、ありませんでしたし……お話したとおり、ちゃんと現金で支払いを受けていたわけですから」
「そうそう、その現金だ。囚人が、どうして、そんなに現金を持っていたのかな？」
「ばくち場や、女郎屋なんかから、さらってきたという話もありますねえ……もちろん、船の金庫のなかにだって、多少はあったでしょうし……」
「恐れ入りましたよ。まるで、事実だったみたいに、隅から隅までちゃんと説明がいきとどいている……」内心私は呆れ、その執念深さに、かえって夢をこわされる思いで、「しかし、けっきょくのところ、伝説は伝説なんだ。何うじたばたしてみたって、伝説が事実になんか、なりっこありませんからね。いくら枝葉に、もっともらしい理屈をつけてみたところで、昔々婆さんが川に洗濯にという、その第一行を疑ってしまえば、それですっかり御破算なんだ……伝説なんてものは、多少説明のつかない所があるくらいの方が、かえって親しめるんじゃないですか？」
　私の語気が強すぎたのか、福地氏は小首を傾げて、気まずそうな微笑を浮べ、
「もちろんですとも……分らないからこそ、気を惹かれるんですな……現に、この話だって、肝心なところは、何一つ分っちゃおりません……三百もの人間が、それっきり、一体どこに消えてしまったのやら……」
　ふと、私にも、飲込めたような気がした。福地氏を異常に偏執的だと思ったのは、私だけの勝手な勘繰りで、事実はまったく逆に、卑俗と言ってもいいほど現実的な関心だったのかもしれないのだ。そう考えたほうが、ずっと説明もつけやすい……

「そうか、分りましたよ！　つまり、宝探しをやろうってわけでしょう？　その当時の大砲なら、骨董品としても、相当の値打だろうからな……」

まえの苛立ちの、埋め合せのつもりもあって私はことさら陽気にふるまったつもりだが、福地氏は、予期に反して、怪訝そうに私を見返したまま、黙り込んでしまった。どうも勝手がちがう。私も、途中まで出かかった笑いを、不器用に元に押しもどしながら、原野にも、伝説にも、もういいかげん食傷気味だった。

私たちは、沈黙をもてあましながら、待たせておいた、ジープに戻った。ジープが走り出して、しばらくたってから、やっと福地氏が口をひらいた。申しわけなさそうな、詫びるような口調だった。

「いずれ、そのうち、お話できるようになるかもしれません。なんだって、こう、こだわらなけりゃならないのか……どうも、多少、性分なのかもしれませんな……お気にさわったらお許し下さい……それはともかく、あなたのおっしゃる、昔々、はたして婆さんが川に洗濯に行ったかどうか、という点についてですがね……じつは、この点についてだけは、まことにはっきりとした証拠品が残っているんですよ。戻ったらお目に掛けましょう。ちょっとした、値打ち物であることだけは、保証つきの品ですから……」

宿に戻ってから、福地氏が見せてくれた、その値打ち物というのは、一枚の大型の色紙だった。陽に焼け、しみがつき、角がくずれ、全体に黄ばんで、もうかなりの時代物らしい。それより奇妙なのは、空中に、褌一枚の男が、仰向に浮んでおり、下から薪の火で焼かれているその図柄だった。そし

で、その上の空白に、「熱気死」と、早口のおしゃべりのような字体で、書きなぐってある。落款は、柳川と読めた。

「お分りですか？　この、柳川というのが、誰のことか……」

おあいにくさま、分るはずがない。だが、絵柄のほうは、「熱気死」という讃からしても、どうやら火葬の図らしい。しかし、こんなものが、どうして囚人の叛乱の証拠になったりするのだろう？……逃げおくれた囚人の一人が、捕えられて、火炙りにされたとでも言うのだろうか？　……馬鹿馬鹿しい！　……子供だましも、ほどほどにしてもらいたいものだ！　こんなことで、証拠だと言うのなら、昔この辺に、食人種が住んでいたという証拠にだってなりかねまい……そんなこじつけは、使えば使うほど、かえって怪しまれるものだということがこの男には分らないのだろうか！

福地氏は、私の反応を、余さず見届けてやろうと言わんばかりに、じっと視線を据えたまま、

「柳川……すなわち、榎本武揚のことなんです。東京下谷の柳川横町で生れたので、柳川と号していたらしいんですな。最後の反政府軍として、函館五稜郭にこもって闘いつづけた、榎本釜次郎武揚……」

「榎本武揚なら、知っていますが……しかし、この絵はいったい、どういう意味なんです？」

「読んで字のごとし……熱気のために、死んでいる……熱をアツと読み、気をケと読み、死をシと読んで、つづけてみれば、アツケシとなります……つまり、この辺の地名をさしているわけですな」

「それで？」

「それでって、それだけのことですよ」

私は、わけが分らなくなり、ぼんやりしてしまった。福地氏は、私がこうなることを、あらかじめ予期していたらしく、満足そうにうなずいて、「つまり、分りやすく言えば、しゃれなんですね。榎

本さんという人は、そういう人だったらしいですよ。とにかく、冗談が好きで……どうです、なかなか、面白いでしょう？」

分りやすくも、くそもない。こんなものは、しゃれでもなんでもなくて、ただの悪ふざけだ。しかし、福地氏にしてみれば、おそらく家宝なのだろうと思い、けちをつけるのだけは我慢した。

「それで、この駄洒落が、どこで囚人の叛乱と結びつくんです？」

「お話しましょう……」福地氏は、居ずまいを正して、鼻をすすった。「べつに、この絵が直接結びつくわけではありません。しかし、榎本さんが、ここに居たという証明にはなってくれますね？　榎本さんは、例の伝説の、大事な生き証人なんですから、この絵はいわば、証人の身分証明書と言ったところでしょうかな……」

生き証人と言っても、福地伸六氏が直接、榎本武揚に会ったわけではむろんない。問題になった発言をふくめて、すべて、伸六氏の祖母を通じて伝えられたものである。榎本が、開拓使四等出仕として、厚岸に現れたのは、日付ははっきりしないが、明治五年の夏のころだったらしい。そのときの宿が、場所こそ現在とはちがっているが、この同じ福地屋旅館だったというわけだ。伸六氏の祖母の印象によると、榎本は、身分に似合わず、気さくで、愛想のいい男だったという。もっとも、実際にはむしろ無口なほうで、ほとんどいつも読書をしているか、昼間採集して来た石や土の整理をしているか、さもなければぼんやり考え事にふけっていた。しかし、黙っていても、眼や口元がたえず誰かに話しかけているように、生々と表情に富んでいるので、それでつい、愛想がいいような印象が出来上

ってしまったのかもしれない。

だが、酒も四、五本を空にすると、こんどは本当に陽気になった。いくぶん上体をそらせ気味にして、得意の口ひげを軽く指先でおさえながら、寸詰りの首を、左右にふっては、なにか冗談にする材料はないかと、笑う機会を待ち受けている。供を三人つれていたが、五人でする西洋花札のようなものに、見知らぬ隣の客をさそいこんで夜更までつづけたり、かと思うと、それこそ唐人の寝言のような歌を、女中たちをつかまえて、むりやり教えこもうとしてみせたり、酒を飲んだ榎本は、どうやら誰もが自然に吸いよせられて行くような、はずんだ空気をつくり出す名人だったらしい。

例の色紙を、小魚がはねるような筆さばきで一気に書き上げてみせたのも、たしかそんな空気の中でだったという。榎本をとりかこんだ一同は、まずその筆さばきに驚嘆の声をあげ、つづいてその絵の意味の分らなさに、声をひそめた。その沈黙を追いかけるように、余白に「熱気死」と書き込み、たぶんしばしば使う手なのだろう、すぐに飲込んで噴出しかけた供の一人を、眼で制し、見るからに深刻そうなその絵の謎を解こうと、息をつめている一同の表情を、得意そうに眺めまわした。

誰もが、すぐに降参してしまったが、伸六氏の祖父だけは、一応文字の心得もあったので、なんとか解こうとねばりつづけた。あまりねばりつづけたので、しまいに座が白けはじめ、同情した榎本が、種明しをしてくれたときには、祖父はまっ青になって、全身汗みずくだったという。おかげで、せっかくの種明しも、変にぎこちないものになってしまった。あらためて、酒をくみ交しながら、座がいったん静まったとき、かたわらで酌をしていた祖母にふと榎本が、小声で話しかけてきたのである。あとあとまで、尾を引くことになった、その謎めいた一と言を……

——たしか、おととしだと思うが、この辺に、軍艦を乗っ取った徒刑人が、上陸してこなかったかね？

いかにも、何気ない調子だったので、祖母もすぐにはその意味を理解できず、やがて理解しはじめると、事の重大さに、舌がこわばって、声も出せなかったという。

もっとも、出せても、なんと答えたらいいやら、分らなかったにちがいない。町の役人たちからは、強く口外無用を言いわたされていた。口外無用というよりも、役人たちは、あの事件があったことさえ、認めまいとするのだった。なかったものを、あったように言うのは、悪質な流言蜚語だというわけだ。うっかり、口にしただけで、重敲(じゅうたた)きの上、入牢などという目をみた者さえいた。まだつい、一昨年のことで、誰の記憶にも生々しく印象づけられていたはずだが、そこまで強制されてみると、不思議なもので、みるみる記憶も薄れて行き、ときには実際に夢だったような気さえしてくるのだ。ある夜、原野に向って、雪をふみ固めた道がついていたことも、共和国などという聞きなれぬ言葉を、いつの間にやら耳にして憶えこんでいたことも、すべて、気の迷いにすぎなかったのかもしれない……

それなら、首を横に振ればすむことだったが、しかし、榎本武揚は、役場のお役人などよりも、もっと上のお役人だ。上のお役人が、下のお役人とは、反対の命令をした場合は、いったいどちらの命令に従えばいいのだろう？　自分一人で考えるに、あまりに重大すぎることだったから、祖父と相談してから答えようと思っているうちに、榎本はいつか他の話題のなかにまぎれこんでしまって、それっきりその問題については二度とふれようとはしなかった……

「いかがです？　榎本さんは、どこで聞き込んだものやら、ちゃんと存じておられたんですな……つまり、例の件を知っているという、しかも歴史的に身元の明らかな第三者が、ここに登場して来たわけです。こいつは、ちょっと、面白い話だとはお思いになりませんか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com